The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Brachial-Ankle Pulse Wave Velocity as a Predictor of Silent Cerebral Embolism after Carotid Artery Stenting
Author(s)	村上, 知義
Citation	大阪大学, 2018, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/69448
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

論文審査の結果の要旨及び担当者

（申請者氏名）

村上 知義

		（職）	氏　名
論文審査担当者	主　査	大阪大学教授	豊島 靖子
	副　査	大阪大学教授	藤野 裕士
	副　査	大阪大学教授	望月 秀樹

論文審査の結果の要旨

近年、頚動脈狭窄症に対する標準的治療法として頚動脈ステント留置術が一般的に行われるようになってきている。頚動脈ステント留置術の主な合併症として術後脳塞栓症があり、合併症率の低減が課題である。頚動脈狭窄病変の性状が術後脳塞栓症と関連しているとの報告が多いが、全身の動脈硬化が術後脳塞栓症に及ぼす影響は明らかではない。今回、頚動脈ステント留置術施行症例における動脈硬化の程度と術後脳塞栓症との関連についての観察研究を行った。

動脈硬化の評価法として上腕-足首間脈波伝播速度（baPWV）を用いた。baPWV値が高値であるほど動脈硬化は強いとされる。2015年4月から2017年2月までの予定の頚動脈ステント留置術21例においてbaPWVを測定し、術後脳MRI拡散強調画像（DWI）高信号数を評価し、患者背景と治療の詳細を含めた各種因子との関連を解析した。

全baPWVの平均値は1879 cm/sであった。脳血栓塞栓症と年齢やplaqueの性状、プロテクションデバイス、ステントの種類などとの相関は認めなかった。しかし、baPWV高値はDWI高信号数の独立した予測因子であった（p=0.0017）。

頚動脈ステント留置術において、baPWV高値を認めている症例では、術後の無症候性血栓塞栓症を起こしやすいことが示唆された。

上記の研究結果は学位に値するものと認める。

論　文　内　容　の　要　旨
Synopsis of Thesis

氏　名 Name	村上 知義
論文題名 Title	Brachial-Ankle Pulse Wave Velocity as a Predictor of Silent Cerebral Embolism after Carotid Artery Stenting （頚動脈ステント留置術後の無症候性脳塞栓症予測因子としての上腕-足首間脈波伝播速度の有用性について）

論文内容の要旨

〔目　的(Purpose)〕

脳血管内治療において、動脈硬化が治療へ及ぼす影響は明らかではない。今回、頚動脈ステント留置術施行症例における動脈硬化の程度と術後脳塞栓症との関連についての観察研究を行った。

〔方法ならびに成績(Methods/Results)〕

動脈硬化の評価法として上腕-足首間脈波伝播速度（baPWV）を用いた。baPWV値が高値であるほど動脈硬化は強いとされる。2015年4月から2017年2月までの予定の頚動脈ステント留置術21例においてbaPWVを測定し、術後脳MRI拡散強調画像（DWI）高信号数を評価し、患者背景と治療の詳細を含めた各種因子との関連を解析した。

全baPWVの平均値は1879 cm/sであった。脳血栓塞栓症と年齢やplaqueの性状、プロテクションデバイス、ステントの種類などとの相関は認めなかった。しかし、baPWV高値はDWI高信号数の独立した予測因子であった（p=0.0017）。

〔総　括(Conclusion)〕

頚動脈ステント留置術において、baPWV高値を認めている症例では、術後の無症候性血栓塞栓症を起こしやすいことが示唆された。